様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０３１２
研究課題名（和文）　草稿資料に基づくプルーストと同時代文学事象の研究

研究課題名（英文）　A study on Proust and contemporary activities of literature, based on his manuscripts

研究代表者
和田　章男（WADA　AKIO ）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00191817

研究成果の概要（和文）：
プルーストの文学観の形成および小説創造に同時代の文学事象や批評言説がどのように影響したかを明らかにすることを目的として､バルザックの創作法との共通性とその意識化の過程、フローベールに対する見方と同時代批評および批評史との影響関係を調査するとともに、草稿資料に基づきながら､「ゴンクール未刊日記」の出版状況と小説への導入との関連性、およびゴンクールのレアリスム的な文学観への批判から回想録風の時間表現への批判への移行を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
For the purpose of making clear the influences of contemporary activities of literature and criticism on Proust’s literary views and the creation of his novel, I studied his process of recognizing similarities which lie between his way of writing and that of Balzac, and the relationship between his opinion of Flaubert and the contemporary criticism of the same writer ; I also examined the introduction of the pseudo-journal unpublished of Goncourt into Proust’s novel, being based on his manuscripts, to find out a transition from a critical attitude toward his realistic view of literature to a criticism on his expression of Time in the style of memoirs.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：プルースト、『失われた時を求めて』、生成研究、草稿研究

１．研究開始当初の背景

本研究課題はプルースト研究およびフランス文学研究における二つの潮流を背景として持つ。それは草稿資料に基づく文学作品の生成過程の研究と、文学作品を同時代の文化的・社会的コンテクストの中に位置づけ直そうとする歴史的文学研究である。

（１）作家の自筆原稿の綿密な調査・分析に

基づいて、作品の成立過程を明らかにしようとする「生成研究」は、1970 年代からプルースト、フローベールなどのフランス近代作家の草稿資料が一般公開されるとともに始まった。それ以来数多くの研究によって、プルーストの大作『失われた時を求めて』の生成過程の大筋は確定されてきた。近年のプルースト草稿研究者の課題は、これらの草稿資料と研究成果の一般公開である。日仏の研究者が中心となって、75 冊の草稿帳（カイエ）のファクシミリと転写版を、詳細な注釈とともに刊行する計画を進めており、これまでカイエ 54（2008)、カイエ 71（2009)、カイエ 26（2010、報告者編集参加)、カイエ 51（2012）が出版された。報告者も本企画に参画している。他方、大阪大学文学研究科フランス文学研究室では、フランス国立図書館収蔵プルースト全草稿のマイクロフィルム 180 巻を所蔵するようになった。このようにしてプルースト草稿資料の閲覧が格段に容易になったことを踏まえ、報告者は 2006～2008 年度科学研究費補助金（基盤研究（C)）によって、研究課題「プルースト草稿資料における固有名の調査と索引作成」を遂行し、2009 年 3 月に 75 冊の草稿帳に関する固有名総合索引 *Index général des Cahiers de brouillon de Marcel Proust* を完成した。この索引は草稿調査に多大な利便性を与えることになり、国内外から大きな反響があった。さらに、本索引は、草稿資料に含まれる多くの実在名によって、テクストの「内部」と「外部」の関係性をより実証的に探究することを可能にし、近年の文学研究の潮流とも合致することになった。

（２）プルースト研究のみならず、フランス文学研究の近年の中心課題は、文学テクストを同時代の文化的コンテクスト、ジャーナリズムなどの言説の中に位置づけることによって、現在では見失われた意味を取り戻させることである。プルーストの草稿は、テクストの生成を跡付けるためばかりでなく、同時代との関係性を検証する上で、極めて有効な資料となる。

本研究においては、作家の同時代の文学事象に焦点を当てた調査・分析を行う。作家名の統計的分析を行った結果、75 冊の草稿帳に見られる同時代作家数は 56 名に及ぶが、そのうち最終稿にまで残るのは 19 名にすぎない（2009 年 18－19 日開催の国際学会において《 L’apparition des noms réels dans les Cahiers de Proust 》「プルースト草稿帳における実在名の登場」という題で口頭発表)。他の時代の作家数に大きな変動がないことを考慮するなら、これは注目すべき現象であり、同時代の文学との関わりを調査する上で、印刷原稿よりも草稿の方がはるかに有効であることを証している。執筆が 14 年に及び、1 巻本から 7 巻本へと大きく膨張した『失われた時を求めて』の場合、創作途上において生じる社会的・文化的出来事や個人的体験、読書、観劇、展覧会訪問などが小説創造に霊感を与え、増幅させ、軌道修正を促すことがしばしば起るのだ。

２．研究の目的

本研究においては、同時代の文学事象がプルーストの文学観形成および小説創造にいかなる役割を果たしたかを明らかにすることを目的としている。同時代とは、プルーストが作家活動を始めた 1890 年代から第一次世界大戦直後の 1920 年頃までを指す（1922 年プルースト没)。「文学事象」としては、同時代作家・作品、および過去の作家・作品に対する同時代の批評、という二つの観点を含める。

（１）【同時代作家・作品との関係】

プルーストは小説創作に先立って、『サント＝ブーヴに反論する』という仮題のもとに、同時代作家を評価できなかったことを理由に、サント＝ブーヴの伝記的批評方法を批判したが、プルースト自身が同時代作家をどのように評価したのかという問題は十分に研究されていない。それは印刷稿に同時代文学への言及が乏しいことに起因している。報告者が作成した『プルースト草稿帳総合索引』に基づき、75 冊の草稿帳に現れる同時代の作家、批評家、作品を抽出し、物語との関連、プルーストの批評・評価の仕方を調査する。とりわけ作家としての形成期にあたる 19 世紀末の二大文学潮流である自然主義と象徴主義に関するプルーストの姿勢は注目すべきである。

（２）【過去の作家・作品に対する同時代批評との関係】

プルーストは『サント＝ブーヴに反論する』において、サント＝ブーヴが軽視した 19 世紀の大作家を採り上げ、独自の批評を展開している。報告者はこれまでボードレール、ネルヴァル、ルコント・ド・リールに対するプルーストの見方を、それぞれの作家の批評史・受容史の中に位置づける試みを行ってきた（「プルースト最後の評論『ボードレールについて』」*GALLIA*、35 号、1996 ;「プルーストとネルヴァル批評」『大阪大学大学院文学研究科紀要』47 巻、2007 ; 《 Proust et Leconte de Lisle ： un autre poète dans le *Contre Sainte-Beuve* 》, *GALLIA*, 47 号、2008)。本研究では、同作品で扱われた他の二人の大作家バルザックとフローベールに対するプルーストの批評や見方を採り上げ、同時代批評との異動を検証するとともに、小説創造に

いかに取り込まれていったかを考察する。

３．研究の方法

本研究の主な資料は、①プルースト草稿資料、②プルースト書簡集、③新聞、雑誌等の文芸ジャーナリズム、である。プルースト草稿資料（①）については、大阪大学文学研究科フランス文学研究室所蔵のマイクロフィルム 180 巻を調査する。75 冊の下書き草稿（Cahiers de brouillon）を主な調査対象とするが、清書原稿、タイプ原稿。校正刷り等、他の資料も適宜参照する。その際、報告者が作成した『プルースト草稿資料総合索引』、および作家名の統計表を活用する。

フィリップ・コルブが編纂した 21 巻から成るプルースト書簡集（*Correspondance de Marcel Proust*, Plon, 1970-1993）が第一級の資料となることは言うまでもないが、1996～1997 年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）による共同研究「固有名詞調査に基づく『プルースト書簡集』の総合的研究」（研究代表者：吉川一義、報告者は研究分担者として参加）において作成した *Index général de la Correspondance de Marcel Proust*（『マルセル・プルースト書簡集総合索引』1998、京都大学学術出版会）を活用する。報告者が主に担当した「作品索引」に基づく統計表および分析は多くの示唆を与えてくれる（和田章男「プルーストの文学的・芸術的教養―『プルースト書簡集』作品別および作者別索引に基づく統計的分析の試み―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 41 巻、2001）。

文芸ジャーナリズムに関しては、プルーストが定期購読していた、「フィガロ」紙や「ル・タン」紙などの新聞、「両世界評論」、「メルキュール・ド・フランス」、「ルヴュ・ブランシュ」、「新フランス評論」（*NRF*）などの文芸雑誌が主な調査対象となる。

学会、研究会での発表スケジュールの関係から、バルザックおよびフローベールに対するプルーストの見方の変遷、批評史・受容史における位置づけを先に行い、その後同時代文学事象としてゴンクール未完日記の出版事情にかかわる問題と小説創作との関係の調査を行った。

４．研究成果

（１）プルーストとバルザックの関係についてはこれまでも多く論じられてきたが、本研究においてはとりわけ両作家の創作方法の親近性に着目した。『失われた時を求めて』の第 5 篇『囚われの女』の中で、語り手はワーグナー、ミシュレ―、ユゴー、そしてとりわけバルザックなど 19 世紀の大芸術家の特徴として、作品が「未完成」であること、作家が「作り手」であると同時に、「判断をくだす人」であること（「自己批評」）、「統一性」があとから付与されること、を挙げている。

プルーストの小説もまたこれらの 19 世紀の大作の系譜に属していることは、彼の作品が 1 巻本から 7 巻本にまで大きく膨張したことからも明らかであろう。しかしながら、19 世紀作家についてのコメントは、1909 年春ごろに執筆された「バルザック論」に既に見られる。出版拒否や戦争勃発などの要因によって、出版が延期されるごとに作品は大きく変化・成長していくことになるが、そのような作品の将来を 1909 年段階で予測していたはずはない。1905 年に出版されたアンドレ・ル・ブルトンのバルザック論などによって、『人間喜劇』という総題が小説創作を開始してから 10 年あまり経ってから思いつくことになり、数多くの小説群に統一が後から与えられるようになったことをプルーストは知っていたが、バルザックへの親近感はとりわけ、校正刷りにおける膨大な加筆訂正を行うというバルザック独自の創作法に対してであっただろうと推測できる。

プルーストは『失われた時を求めて』へ発展していく『サント＝ブーヴに反論する』という作品を執筆するときに、初めて「カイエ」（帳面）を使用するようになる。右ページにエピソードごとに下書きを書き、のちに左ページにおいて、他の部分との関連づけや加筆訂正を行いながら、物語に統一を付与していく。このような創作法によって、バルザック流の執筆に近づいているとみなせるが、とりわけタイプ原稿という筆記媒体が重要である。1909 年秋、出版に向けて作成した「コンブレ―」の章のタイプ原稿においては、3 段階にわたる加筆訂正が見られるとともに、とりわけ大きな構成の変化が認められる。また、晩年に作成した『消え去ったアルベルチーヌ』のタイプ原稿においても、重要な挿話を削除するなど、小説最終部の構成を大きく変化させようとする意図が認められる。

このようにプルーストの場合、タイプ原稿の段階で、構成を変える傾向が見られるのだ。つまりタイプ原稿という印字を通して、自分の作品を「読者」として再読することにより、いっそうの緊密な構成を与えることが可能になったのである。それはちょうどバルザックが校正刷りという客観的な印字を通じて自分の作品を「再読」し、「自己批評」を実践することによって、自らの作品により高次な統一感を付与したのと軌を一にしていると言えよう。

本研究成果は、2010 年 6 月 3 日～5 日にパリ・ディドロ大学およびバルザック館で開催された国際バルザック研究会主催の国際学会《 Balzac *et alii*, génétiques croisées, Histoire d’éditions 》（「バルザックと他

の作家たち、交錯する生成研究、刊本の歴史」）において、《 Proust et Balzac : la méthode de travail des deux écrivains 》（「プルーストとバルザック：両作家の創作法」）というタイトルで発表した。本発表内容は論文として 2012 年にパリ・ディドロ大学のサイトによって電子出版された。また、同内容を少し改変した形で、2010 年 10 月 17 日に開催された日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ「印刷物の生成論」（南山大学）において、「「印刷物の生成論」の先駆者プルースト」というタイトルで口頭発表を行った。

（２）プルーストは晩年に「フローベールの文体について」（1920）を発表し、作家の文体について「独創的な」考察を行い、大きな影響を与えた。この論考は当時のフローベールの文体をめぐる論争に触発されたものであった。しかしながら、プルーストのフローベールへの関心は古く、『楽しみと日々』（1896）にもその文体模倣が見られる。特にフローベールとサント＝ブーヴとの対比に強い関心を持っており、パスティッシュ（文体模倣）の連作（1907）においても、両作家を並べているのみでなく、執筆計画の中には「サント＝ブーヴとフローベールについてのエッセー」というテーマも掲げている。ところで、カイエ 29（1910 年初め頃）には、「フローベールに追加すること」（《 À ajouter à Flaubert 》）と作家自身によってタイトルが付けられた 2 篇の批評断片がある。これに先立つ草稿が見つからないため、不可解な標題とされてきたが、報告者はカイエ６、カイエ８、カイエ 10 に含まれるサント＝ブーヴとフローベールにかかわる母親と息子の会話がカイエ 29 の断片に先立つ草稿であると推論する。このような形で物語と理論が呼応していたのであろう。

書簡や著作の綿密な調査から、プルーストはサント＝ブーヴ以降のフローベールについての批評に通暁していると判断できる。バルベー・ドールヴィイー、ジュール・ルメートル、ゴンクール兄弟などはフローベールの文体を卑俗なものと批判するのに対して、フェルディナン・ブリュンチエールやポール・ブールジェは比類のない散文作家としてフローベールを評価する。このようにフローベールの文体をめぐる論争は、1920 年前後に始まるものではなく、既に伝統的なものでもあった。プルーストはフローベール批評史を十分に知りつつ、同時代の批評家チボーデに反論する形で、フローベールの文体を擁護しつつ、「文法の天才」と評価する。

プルーストはフローベールの文章における半過去時制の用法、《 et 》（「そして」）という接続詞の用法、副詞の使い方などの独自性に着目した。しかしながら、このような指摘を行ったのは、決してプルーストが最初というわけではなかった。

プルーストは、フローベールが用いる動詞の半過去形は一種の「悲しみ」を喚起すると指摘するが、これはフェルディナン・ブリュンチエールが 1880 年に『両世界評論』で発表したフローベール論における指摘と類似している。

フローベールは接続詞の《 et 》（「そして」）を通常用いるべきところでは使用せず、通常使用しないところで用い、特別な重みを付加しているというプルーストの指摘は、エミール・エヌカンが 1885 年の『現代誌』に掲載した論考と一致している。プルーストがこの論考を読んだかどうかは定かではないが、共通性を指摘することは無意味ではないだろう。

また、『エロディアス』が「交互に」（《 alternativement 》）という副詞で終わっっており、その位置の意外性と重量感に対するプルーストの分析は、ポール・ブールジェの 1880 年のフローベール論において既に見られるものだったことがわかる。

プルーストは表面上、サント＝ブーヴやチボーデなどに対する反論という形を採りながらも、19 世紀のフローベール批評史を確かに継承しているのである。

本研究成果は、2010 年 11 月 20 日～21 日に関西日仏学会で開催された国際学会《 Proust face à l’héritage du XIXe siècle : Filiations et ruptures 》（「プルーストと 19 世紀遺産：継承と断絶」において、《 Proust et la critique flaubertienne 》（「プルーストとフローベール批評」）という題目で口頭発表を行い、また 2012 年 6 月に *Proust face à l’héritage du XIXe siècle : Tradition et metamorphose*（『プルーストと 19 世紀遺産:伝統と変貌』、Presses Sorbonne Nouvelle）に、《 Proust face à l’histoire de la critique sur Flaubert 》（「プルーストとフローベール批評史」）という表題の論考を発表した。

（３）同時代文学事象として、「ゴンクールの日記」の出版状況およびゴンクールの架空の「未刊日記」の『見出された時』への導入について、草稿資料に基づき調査した。ゴンクールは 19 世紀末のレアリスムから自然主義への文学潮流を代表する作家である。プルーストはドーデ家のサロンでエドモン・ド・ゴンクールと面識がありながら、同文芸サロンの物質的傾向に驚きを示しつつ、反レアリスム的態度を明確にしていく。『見出された時』に導入されたゴンクールの架空の未刊日記は、プルーストの文学観の表明へと至るための反面教師的役割を果たしているのだ。

また、ゴンクールの生前に刊行された「日記」はあくまで抜粋であり、実際に「未刊日記」は存在し、遺言によってゴンクールの死後 20 年経過ののちに公開されることになっていた。それは 1916 年のことであるが、第一次世界大戦中であることや、日記で言及されている人物が生存していることなどの理由により延期され、最終的には 1956 年にようやくすべての日記が公開されることになった。

しかし、未刊日記が存在することは、一般にも知られていた。プルーストは 1915 年に虚構の「ゴンクール日記」の下書きを執筆するが、「未刊日記」と明示するのは 1916 年作成の清書原稿カイエ XV においてであった。つまり現実の未刊日記の刊行が延期されることが明らかになってからのことであった。このことは、プルーストの創作による「ゴンクール未刊日記」の明らかな虚構性にもかかわらず、見かけの「真実らしさ」を保持させることにもなったと考えられる。

プルーストのゴンクールに対する興味は 1915 年に始まったものではない。4 冊の創作ノート（「カルネ」）を調査するなら、ゴンクールへの関心はとりわけ二つの時期に分かれていることがわかる。第 1 期は 1908 年末ころにカルネ 1 に書かれた幾つかのメモに対応し、それらにおいてはサント＝ブーヴとの関連でゴンクールの日記に言及されている。同日記の前半にはサント＝ブーヴが中心人物として登場し、プルーストも同批評家への知識をこの日記から得たことは確かであろう。しかしそれだけではなく、作家たちの逸話への興味や、作家の個性が現れる「会話」の重視という点で、サント＝ブーヴとゴンクールは同系列の作家なのである。『サント＝ブーヴに反論する』という作品を書き始めていたこの時期においては、ゴンクールもまた同系列の作家として批評対象となっていたのだ。

他方、1915 年頃と推定できるカルネ 3 とカルネ 4 では、ゴンクールの独特の表現がそのまま引用されている。これはゴンクールの文体模倣（パスティッシュ）のためのメモであることは間違いない。さらに注目すべきことは、ゴンクールが 17 世紀の回想録作家サン＝シモンと並列されていることである。ゴンクールもまた自らの日記に「文学生活の回想録」という副題を付けていたことと無関係ではない。「回想録」(mémoires) というジャンルは過去の記録ではあるが、それは観察に基づく外部から見た歴史表現である。これはプルーストの内的な時間表現とは相対立するものなのだ。つまり、1915 年頃におけるプルーストの小説は批評を主眼とするものではなく、「時間の小説」に変貌していたのであり、ゴンクールの写実主義的・回想録的な虚構の日記の導入は、真の時間啓示に対するアンチ・テーゼとして機能させようとしたと考えられる。

本研究成果は、2011 年 10 月 1 日開催の関西プルースト研究会で発表するとともに、2012 年 3 月 1 日～2 日パリ高等師範学校およびフランス国立図書館小ホールで開催された国際学会《Proust, l'œuvre des manuscrits》(「プルースト、作品としての草稿」) において、《Les Goncourt dans les manuscrits de Proust》(「プルースト草稿の中のゴンクール」) というタイトルで口頭発表、また学術誌『ステラ』に「プルーストと「ゴンクール日記」」という表題の論文としてまとめた。

同時代の文学事象としては、自然主義とは対蹠的な象徴主義の動きも興味深い。その代表格である詩人マラルメとの関係は重要である。著作や書簡におけるマラルメへの言及、および草稿帳における同詩人への言及を網羅的に調査するとともに、『ルヴュ・ブランシュ』や『メルキュール・ド・フランス』など、プルーストにも縁のある象徴主義的傾向を持つ文芸雑誌の調査も開始した。しかしながら、まだ研究成果を発表する段階には至っておらず、今後の研究課題としている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①和田章男、プルーストと「ゴンクール日記」、『ステラ』、査読有、第 31 号、2012、pp. 87-102.
② Akio Wada, 《Proust et Balzac : la méthode de travail des deux écrivains》, Balzac *et alii*, génétiques croisées. Histoire d'éditions, http://Balzac.univ-paris-didrot.fr/balzacetalii.html, 2012, pp. 1-7.

〔学会発表〕（計６件）
① Akio Wada, Les Goncourt dans les manuscrits de Proust, 国際学会《Proust, l'œuvre des manuscrits》, École normale supérieure, Bibliothèque nationale de France, 2012 年 3 月 1 日～2 日。
②和田章男、プルーストと「ゴンクールの日記」、関西プルースト研究会、京都大学、2011 年 10 月 1 日。
③ Akio Wada, Proust et la critique flaubertienne, 国際学会《Proust face à l'héritage du XIXe siècle : Filiations et ruptures》、関西日仏学館、2010 年 11 月 20 日～21 日。

④和田章男、「印刷物の生成論」の先駆者プルースト、日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ「印刷物の生成論」、南山大学、2010 年 10 月 17 日。
⑤Akio Wada, Proust et Balzac ：la méthode de travail des deux écrivains, 国際学会《 Balzac *et alii*, génétiques croisées, Histoire d'éditions 》, Université Paris-Diderot, Maison de Balzac, 2010 年 6 月 3 日～4 日。

〔図書〕(計８件)
①Akio Wada, *La création romanesque de Proust： la genèse de 《 Combray 》*, Champion, 2012, 204 頁。
②Akio Wada,《 Proust face à l'histoire de la critique sur Flaubert 》, *Proust face à l'héritage du XIXe siècle, Tradition et métamorphose*, Presses Sorbonne Nouvelle, 2012, pp. 51-59.
③ Akio Wada,《 Approche génétique des épisodes du théâtre dans *À la recherche du temps perdu* 》, *Proust aux brouillons*, Brepols, 2011, pp. 269-284.
④Akio Wada,《 La formation des noms de personnages dans la genèse de *À la recherche du temps perdu* 》, *Comment naît une œuvre littéraire ? Brouillons, contexte culturels, évolutions thématiques*, Champion, 2011, pp. 233-243.
⑤ Hidehiko Yuzawa, Françoise Leriche, Akio Wada, *Cahier 26*, Brepols, 2010, 2 vols.

６．研究組織
(1)研究代表者
和田　章男（WADA　AKIO）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00191817